

特殊教育に対する大学生の意識

鈴 村 健 治

Attitudes of College Students towards Special Education

Kenji SUZUMURA*

SUMMARY

A survey of the attitudes of college students towards special education and handicapped children was conducted in terms of positive or negative attitudes. On the whole Ss were showed positive attitudes. The determinants that had influence on the attitude were knowledge and experience.

Significant differences were found between Ss who would become teachers of regular classes and those of special classes but no significant difference was found in sex and grade among them.

は じ め に

将来教師になろうとする大学生が、障害児や、特殊学級をどのようにしてみているか知ることは、特殊教育を見通す上で欠かせない。普通学級を担任している教師も交流教育が盛んになるにつれて、障害児を無視して教育に携わることはできなくなりつつあるし、障害児と接触する機会は今後ますます増加するものと予想される。交流教育については多くの報告がなされているが (e.g., Crisci 1981¹⁾, Hamre-Nietupski & Nietupski 1981⁴⁾, Rider 1980⁷⁾, Kinnison *et al.* 1980⁵⁾, Folio & Norman 1981²⁾, Gottlieb 1982³⁾, Poorman, 1980⁶⁾), 不特定多数の変数が多数あり、また統制できない変数も多く、一般性を導き出すまでにはかなりの時間を要する。変数をみても障害の程度、家庭や同年齢の子ども、活動の内容、そして教師の属性など幅が広い。その中でも特に重要なのは教師であろう。障害児に示す教師の態度は重要な意味を持っている。そして、その態度は、教師になる以前に既に形成されていると考えられる。そこで本調査では、教師になることを希望している学生が、障害者や、特殊学級に対して肯定的態度を示すか、否定的態度を示すかアンケート調査によって調べることにした。

方 法

教員養成大学学生 56 名で、将来教師になることを希望する者を対象としてアンケート

* 特殊教育教室 (Dept. of Special Education)

表 1 性 別

	人 数
男	13
女	43
計	56

表 2 学年内訳

年 次	人 数
1	2
2	5
3	3
4	45
不 明	1

表 3 希望校の種類

	人 数
小 学 校	18
中 学 校	17
高 等 学 校	11
養 護 学 校	6
そ の 他	1
不 明	3

調査を行った。

調査内容 アンケートは知識、態度、印象など広い範囲にわたっている。ここで意図したことは、目的で触れたように障害児に対して肯定的な意識内容を示すか、否定的な意識内容を示すか調べることである。そのためには、回収できなかったものに対しても言及すべきではあるが、基礎資料が得られなかったので触れることができなかった。

アンケート調査質問事項

- 1 特殊学級とはどんな子ども達のための学級だと思いますか。
()
- 2 特殊学級について、あなたはどんなイメージを持っていますか。あてはまる番号のすべてに○をつけて下さい。
 - 1) 暗い感じがする。
 - 2) 明るい感じがする。
 - 3) 同じ学校の中にあっても普通学級から孤立しているように感じる。
 - 4) 幼稚園や保育園と同じような生活をしているように感じる。
 - 5) 特殊学級を受け持っている先生は、はたから見ると普通学級の先生とは違ってへんに見える。
 - 6) なんとなく気持ちが悪いし、自分とは別の世界のことのよう感じる。
 - 7) 和気あいあいとしていて楽しそうである。
 - 8) 特殊学級を今まで見たことがないのでこれといったイメージはない。
 - 9) 特殊学級を受け持っている先生は大変だし偉いと思う。
 - 10) その他 ()
- 3 知恵遅れの子どもの見たり聞いたりしたことがありますか。それは何を通してですか。あてはまるものすべてに○印をつけて下さい。
 - 1) 出身小学校、あるいは中学校に特殊学級があったので。
 - 2) テレビ、映画、雑誌などで見た。
 - 3) 街や駅などで直接見た。
 - 4) 兄弟、あるいは親類に知恵遅れの子どものがいるので。
 - 5) 近所に知恵遅れの子どものがいるので。
 - 6) ボランティアを通して。

- 7) その他 ()
- 4 知恵遅れの子どものとはどんな子どもか説明して下さい。
()
- 5 知恵遅れの子どものをどう思いますか。あてはまるものすべてに○印をつけて下さい。
- 1) 気持ちが悪い。
 - 2) 怖い。恐しい。
 - 3) 別に何とも思わない。
 - 4) ただ、同じ人間だと思う。
 - 5) かわいそうだと思う。
 - 6) かわいらしい。
 - 7) その他 ()
- ※ これからあとの項目は、将来あなたが小学校、あるいは中学校の教員になった場合も想定して答えて下さい。
- 6 あなたが教員になった場合を想定して該当するものに○印をつけて下さい。
- 1) 機会があれば是非特殊学級を受け持てみたい。
 - 2) 何となく特殊学級を受け持ってもいい気がする。
 - 3) 特殊学級は受け持ちたくないが、校長から言われればやる。
 - 4) 絶対に特殊学級は受け持ちたくない。
 - 5) その他 ()
- ※ 以下 () 内のあてはまるものに○印をして下さい。
- 7 特殊学級を受け持つと、給料に〈給料月額の6%+定額〉が上のせされて支給されることになっていますが、あなたは特殊学級を受け持った方が給料が高いということをご存知でしたか。
(はい。 いいえ。)
- 8 養護学校というのはどのような学校なのかご存知ですか。
(はい。 いいえ。)
- 9 一般の学校に、精薄特殊学級(知恵遅れの学級)があるのとないのでは、ある方が普通児の人間形成にとって教育的、社会的にプラスになると思いますか。
(はい。 いいえ。 ?)
- 10 知恵遅れの子どものばかりを集めた学校へ行くよりも、一般の学校の中にある特殊学級へ行った方が、知恵遅れの子どもの人間形成にとって教育的、社会的にプラスになると思いますか。
(はい。 いいえ。 ?)
- 11 大学教育において小・中学校の免許状を取得しようとする学生にはすべて「特殊教育概論」(2単位)程度の授業科目を必修にすべきだと思いますか。
(はい。 いいえ。 ?)

- 12 もし自分が普通学級ではなく、精薄特殊学級の担任であつたら、特殊学級の担任であることを社会生活の場で口にするとき、内心抵抗を感じると思いますか。

(はい。 いいえ。 ?)

- 13 もしも自分の子どもが普通学級か、特殊学級かという境界にいる状態であつたならば、将来のことを考えて、普通学級に在籍させると思いますか。

(はい。 いいえ。 ?)

- 14 将来、自分の子どもは特殊学級のある小学校とない小学校では、ある小学校に通わせたいと思いますか。

(はい。 いいえ。 ?)

- 15 知恵遅れの子どもは普通児に乱暴する傾向があると思いますか。

(はい。 いいえ。 ?)

- 16 普通児は知恵遅れの子どもをいじめることがあると思いますか。

(はい。 いいえ。 ?)

- 17 普通学級の子ども達に、教師が障害児についての話をしたり、一緒に話し合ったりすることが必要だと思いませんか。

評価方法 評価の基準は、肯定的態度、どちらともいえない、否定的態度の3段階で行い、順に3, 2, 1の得点を与えた。問1に関しては、正しい答えを肯定的態度とみなし、誤った答えを否定的態度とみなした。同様に問2では、2), 7)を3点, 4), 8)を2点, 1), 3), 5), 6)を1点とした。また9)は、肯定、否定の両面から答えられるため、他の問に対する傾向から判断した。

問3の4)と6)は3点, 1)と5)は親密さの程度で3点, 2)と3)は1点, 問4は説明の程度によって3段階に分けた。問5は3)と6)が3点, 4)と5)が2点, 1)と2)が1点とした。問6は1)を3点, 2)を2点, 3)と4)を1点とした。問7以下は否定的な問題と肯定的な問題があるので、7, 8, 9, 10, 11, 14, 17については“はい”の答えを3点, “?”を2点, “いいえ”を1点とし、12, 13, 15, 16は逆に“いいえ”を3点として得点した。

結 果

精神薄弱児を主とする障害児に対して肯定的な目でみるか、否定的な目でみるか、中庸的態度をとるか計算すると、全体では $t=2.84$, $df=895$, $P<0.001$ で有意差がみられ、肯定的な目でみていることがわかる。各項目ごとにみると、1, 3, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14の9項目は肯定的であり、5, 6, 7, 15はいずれともいえず、2, 4, 16の3項目において否定的な態度がみられる。

各項目ごとの t 検定(df はいずれも55)の結果は、

- | | |
|----------------------|---------|
| 1 特殊学級についての知識 | 2.56*** |
| 2 特殊学級についての印象 | 1.68*** |
| 3 精薄児に接した経験の度合 | 2.73*** |

表 4 項目間の相関係数

2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
-0.134	0.452**	0.239	0.267*	0.022	-0.170	0.230	0.366*	0.100	0.323*	0.204	-0.138	0.218	0.017	0.107	0.582**
-0.096	0.251	0.232	0.320*	0.134	-0.100	0.174	0.074	0.074	-0.277	-0.138	-0.016	0.054	-0.153	-0.134	0.130
0.248	0.115	0.119	-0.053	0.235	0.241	0.091	0.351*	0.220	-0.299	-0.024	-0.015	-0.191	-0.145		
	-0.106	0.181	0.204	0.177	0.296*	0.036	0.096	0.004	-0.132	0.034	0.135	-0.184	0.184		
		0.393*	0.235	0.136	-0.090	-0.173	0.044	0.274*	-0.199	-0.009	-0.009	-0.010	0.303*		
		0.112	0.178	0.177	-0.097	-0.097	0.075	0.227	-0.125	0.202	-0.022	-0.168	0.168		
		0.128	0.098	-0.065	0.082	0.097	-0.148	0.090	-0.115	0.140	0.130				
		0.060	0.047	0.215	-0.043	-0.087	-0.044	0.167	0.093	0.184					
		0.705**	0.146	0.034	-0.133	0.662**	-0.055	-0.139	0.369*						
			0.094	-0.016	-0.012	0.514**	0.089	-0.082	0.300						
			-0.017	-0.352*	-0.194	0.077	-0.075	0.075	0.477**						
						0.099	-0.112	0.105	0.347*						
							-0.077	0.093	0.351*						
								0.134	0.166						
									0.018						

4	精薄児についての知識	1.82*
5	精薄児に対する印象	2.04
6	特殊学級担任希望の有無	1.98
7	特殊勤務手当についての知識	1.96
8	養護学校について	2.36**
9	普通児にとっては特殊学級があったほうが人間形成にプラス	2.61***
10	養護学校よりも特殊学級が良い	2.38**
11	特殊教育に関する授業科目の必要性	2.61***
12	特殊学級を担任することに対する抵抗感の有無	2.80***
13	自分の子どもの場合、特殊学級よりも普通学級への通学希望	2.54***
14	特殊学級併設校への通学を希望	2.57***
15	精薄児が普通児に乱暴する傾向	2.11
16	普通児が精薄児をいじめる傾向	1.04***
17	障害児についての教師が子どもに教える必要性	∞***

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

次に、各項目間の相関をみてる。

相関が有意であるのが、1-3, 1-5, 1-9, 1-11, 1-17, 2-6, 3-11, 4-9, 5-6, 5-12, 9-10, 9-14, 9-17, 10-14, 10-17, 11-13, 11-17, 12-17, 13-17, 14-17であった。更に片側検定では1-4, 1-8, 2-4, 2-5, 2-11, 3-4, 3-8, 3-9, 3-13, 5-7, 5-17, 6-12, 11-14に5%水準で有意差がみられる。

各項目において1か3に印をつけた者を比較したのが表5である。2, 3, 12, 13, 16の項目を除いて有意差がみられる。つまり、肯定的な態度をとるか、否定的な態度をとるかを決定する要素として1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 14, 15, 17が関与していることになる。

性差はみられない。また、学年差は、4年に片寄っているので、3年以下と4年とで比

表 5 各項目における肯定的・否定的態度

項 目	<i>t</i>	<i>df</i>	項 目	<i>t</i>	<i>df</i>
1	4.173***	33	10	4.647***	27
2	1.082	30	11	3.040**	46
3	1.268	43	12	1.379	47
4	4.229***	20	13	0.296	34
5	3.441**	8	14	3.665***	38
6	2.838**	25	15	2.124*	43
7	3.412**	53	16	0.582	54
8	4.105***	54	17	∞***	54
9	3.178**	38			

* $P < 0.05$ ** $P < 0.01$ *** $P < 0.001$

較したが、有意差はみられなかった。希望学校の種類では、小学校、中学校、高等学校の間では差がなかったが、それらと特殊学級、または養護学校を希望する者との間に1%水準以下の有意差がみられた。

考 察

将来、教員として指導的立場に立つであろう学生が、障害児・者にどのような態度をとるか調べることは社会的に意味があるわけで、本調査ではそれを肯定的態度、または否定的態度ということに絞って調べてみた。全体的には肯定的な態度を示しており、障害児（主として精神薄弱児）に関する知識もかなり持っていることがわかった。特殊学級に関する知識が全くなかった者は56名中2名だけで、知らなかった者がむしろ例外といえる。しかし、ほとんどの者が精神薄弱児のための特殊学級を想定していて、情緒障害や、言語障害などについて触れたものはいない。

問2の特殊学級に対する印象は否定的であった。悪い印象を持っている回答をみると、暗い感じがすると答えるとともに、特殊学級を受け持っている先生は大変だし偉いと思うというのが目立つ。つまり、普通児と違って精神的にも肉体的にも先生は大変だろうし、そういった生徒を相手にして指導する忍耐強さや、我慢強さに対して感心する気持が現れている。逆にみると、自分にはできそうにもないことをしているための偉さであり、実際に接することになると態度が否定的になるわけで、人間関係の深さと立場によって態度が変わることがわかる。

問3で最も多かったのは、街や駅などで直接みたということで27.56%であった。以下、出身校や特殊学級があったためが25.64%、テレビなどを通して知ったのが23.08%で、それ以外は10%以下であったが、全く見たことがないという者は見当らなかった。障害児を知る機会として特殊学級やマスコミは大きいですが、それよりも、障害者が地域社会で生活できるようになり、人目をばからなくなったことが大きい。

問4に関しては56名中16名が不適切な説明を行っている。正しく説明できたのは6名であり、精神薄弱児のイメージがわく程度であることがわかる。しかし、養護学校については知っている者が多く、特殊教育が一般に浸透していることも確かである。そういった知識が障害者との距離を接近させ、抵抗感を減少させる基になっている。その傾向が問9以下の肯定的な反応に現れている。養護学校のような障害者だけの閉鎖的な社会よりも、一般社会に近づいた特殊学級が良いと思われているし、できれば健常児と交流しながら成長できる普通学級に在籍したほうが良いと思っている。

問9以下は障害者の利益、障害の程度、周囲の状態の3点から考えなければならない。一般社会において生活することが障害児の成長にプラスになると判断しても、周囲の環境が整備され、十分受け入れる態勢になっていなければならないし、障害が重ければ一般社会では受け入れられない状態になってしまう。アンケート調査における特徴は、精神薄弱児を想定して記入した者が多く、しかも軽度な障害を想定して書いている。10年前の特殊教育は、軽度精神薄弱児が大半を占めており重度な者はいなかった。したがって普通児

とほとんど同じで日常生活に支障がない者を対象としているために肯定的であったのかもしれない。障害が重く、異常であることが一見してわかるような子どもは含まれていないことを考慮すべきであろう。

障害者を受け入れる過程には大きく分けて3段階の心理的な変化がある。この変化は、障害が重くなればなる程顕著になる。健常者が障害者を知らない時は、机上の知識として自分なりに解釈して受け入れる。しかし、このように肯定的な場合でも、障害者に会った時は現実との間にギャップがありすぎて拒否的、否定的になるのが普通である。そして親密度が高くなるにつれて障害に対する知識や慣れが増加して理解されるようになり、受け入れられるようになる。したがって、調査結果を一括してしまうことは危険であるが、基本的には肯定的な立場にたつ者が多いとみることができる。

知識が十分でないために否定的態度をとる例として問6があげられる。特殊学級を担任したくないと答えた理由として最も多かったのは、障害に対する専門的知識のなさからくる自信のなさや、不安からであった。また接触の程度による差は問3の下位項目に生じてくる。

アンケート調査は、一般的な立場にたって答える項目と特殊な立場にたって答える項目があり、立場によって差が生じる。一般的な立場では肯定的であったのが、問6のように特殊な立場にたつと否定的、消極的になってしまう。例えば、問6と13とを比較してみるとわかる。問6で否定的な態度を示した17名のうちで、問13の「もしも自分の子どもが普通学級か特殊学級かという境界にいる状態であったならば、将来のことを考えて普通学級に在籍させると思いませんか」という問に対して、普通学級に入れると答えた者は14名で、特殊学級と答えた者は1名だけであった。この回答は特殊学級の担任にはなりたくないという希望と一致しているようにみえるが、自分の子どもに関しては普通学級を希望しているわけで、普通学級で障害児を受け持たなければならないこともあり、答えに矛盾が生じる。この矛盾が個体内で無理なく生じたのは、一般的な立場にたつた時と特殊な立場にたつた時の違いが反映しているからであり、その二面性を考慮しなければならない。

項目間の相関をみると、特殊学級についての知識を高めるためには障害者と接することと、障害児に関する講義を受けることが必要であることがわかる。当然のことではあるが、ここで重要なのは、知識を得ることの必要性を感じているか否かによって違ってくることである。与えられるのではなく自ら求めているところに注目しなければならない。

特殊学級に対する印象と、特殊学級担任希望の有無とが相関している。特殊学級に対する印象は小学校、中学校で抱いたものであり、大学に入ってからのもではなかろう。もしもその当時の特殊学級の印象が良かったならば、特殊学級を担任してもよいと希望する者が増加しよう。それと同時に、障害者に対する正しい知識を小学校で教わることが重要である。それが精神薄弱児に関する概念とも大いに相関する結果となっている。

精薄児に対する親しさの度合いが高くなる程特殊教育に関する知識や理論を必要とすることが明らかにされた。特殊教育に関する知識はそれだけでは何の役にもたたない。障害児と接する機会があることによって必要性が生じてくるわけであるから、接触の度合いと相関

するのは当然である。

精薄児に対する印象の良し悪しが特殊学級の担任を希望するか否かを決定する。それはまた、特殊学級を実際に受け持った時の抵抗感とも関係している。精薄児に対する印象が良いことが重要であり、そのためには障害児をよく知る必要がある。項目9と項目10, 14, 17とが相関しているが、これも障害児を知る機会があるほうがよいことを示唆している。逆にみると、障害者もできるだけ一般社会の中で活動するようにしたほうがよいことになる。普通児と障害児が交流することでお互いのプラスになるとみていることは、項目10と13の相関関係にも現れている。閉鎖的な環境よりも開放的な環境の下で育てることが望ましいと考えている。

項目11と13とが相関していることは、現実的な問題から解釈される。普通学級が適しているか、特殊学級が適しているか判別するためには理論的裏付けがなければならない。そのためには、特殊教育に関する授業を受けることが最も簡単な方法である。

最も相関の数が多かったのが17であった。小学生の時に障害児に対する知識が深まれば障害児に対する見方が変わってくるであろうし、障害児を受け入れる場合でも抵抗感が少なくてすむであろうと感じていることを反映している。

肯定的な見方をするようになるか、否定的な見方をするようになるかを決定する要素としては12項目あげられた。しかしここで注目しなければならないのは有意差がなかった項目3であろう。結果として肯定的、または否定的態度に影響しないことになっているが、これは相殺されたためと思われる。個々のケースをみれば、知識が増加するにつれて否定的になることも起こりうる。肯定的態度を形成するためには相互に交流することが必要であるが、一方そうすることによって否定的態度が生じることもある。そのために有意差がなかったのである。したがって、有意差はなくても態度に影響を与える要素とみてよからう。

要 約

障害児に対して肯定的態度を示すか、否定的態度を示すか教員養成大学学生を対象としてアンケート調査を行ったところ、全体としては肯定的であった。17項目のうち10項目において肯定的であり、4項目がどちらでもなく、3項目が否定的であった。その要因は知識と接触の程度であり、障害児についての知識は求めており、子どもの頃から知ることが望ましいと考えている。また、接触する機会はいろいろな場所で可能であり、それだけ障害者が一般社会で生活していることがわかる。このような機会が一般の人達に障害を理解させる基になっていると考えられる。

引 用 文 献

- 1) CRISCI, P.E. 1981 Competencies for Mainstreaming: Problems and Issues. Education and Training of the Mentally Retarded, 16, 175-182.
- 2) FOLIO, N.R. & NORMAN, A. 1981 Toward More Success in Mainstreaming: A Peer Teacher Approach to Physical Education. Teaching Exceptional Children, 13(3), 110-

- 114.
- 3) GOTTLIEB, J. 1982 Mainstreaming. Education and Training of the Mentally Retarded, 17, 79-82.
 - 4) HAMRE-NIETUPSKI, S. & NIETUPSKI, J. 1981, Integral Involvement of Severeley Handicapped Students within Regular Public Schools. The Journal of the Association for the Severely Handicapped, 6(2), 30-39.
 - 5) KINNISON, L. R., HAYES, C., and ACORD, J. 1981 Evaluating Student Progress in Mainstream Classes. Teaching Exceptional Children, 13(3), 97-99.
 - 6) POORMAN, C. 1980 Mainstreaming in Reverse with a Special Friend. Teaching Exceptional Children, 12(4), 136-142.
 - 7) RIDER, R. A. 1980 Mainstreaming Moderately Retarded Children in the Elementary Physical Education Program. Teaching Exceptional Children, 12(4), 150-152.